



# バッハの森通信

第 136 号  
2017 年  
7 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : [info@bach.or.jp](mailto:info@bach.or.jp)

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

## 永続的感動を呼ぶ音楽

### バッハの音楽の魅力と難しさ

去る 6 月 25 日のレクチャーコンサートは、記念奏楽堂が満席になる盛況でした。今年、1 年かけて練習しているバッハのモテット「イエスよ、私の喜びよ」(BWV 227) を、今回は全 11 曲中 8 曲、演奏することができました。12 月のクリスマス・コンサートで全曲演奏出来るようになることが、9 月に始まる秋のシーズンの課題です。

コンサート直後に何人かの方々から感想をうかがいました。このモテットを歌ったことがある方々からは、素晴らし演奏で感激した、それに詳しいレクチャーでこの曲が何を意味しているのか、初めて分かった、というコメントをいただきましたが、他方、ある方（自己紹介によると大学 4 年生）から、音楽は素晴らしかったけれど、お話しは何も分からなかった、と正直な感想を聞かされました。どちらの感想も、バッハの森の活動を反省するために貴重な声として有り難くうかがいました。

\* \* \*

これまでバッハの森クワイアは、大抵、季節のカンタータから主な合唱曲を、1 シーズンに 1 曲だけ選んで歌ってきました。それに比べて、このモテットが難しいことは分かっていたのですが、いざ練習を始めてみると、難しいことが更にはっきりした、と指揮者の比留間恵さんが言っていました。それは歌詞の説明を担当する私にとっても同じことです。物語性があるカンタータと違って、「霊と肉の対立」というような教理的な問題を歌詞にするモテットのメッセージを、皆さんに分かってもらえるよう説明するのは、至難の業であることがよく分かりました。多分、この種の話は初めて聞いたと思われる方には、私の説明が何も分からなかったのでしょうか。無理もないことだと思います。

ただ、「レクチャーは何も分からなかった」と正直に認めた方も、「勉強していないので」と言い訳をしていました。まさにその通りです。バッハの音楽は、私たち日本人にとって、間違いなく「異文化」ですから、それが何を語っているのか知るためには、まずドイツ語から学ばなければなりません。しかし、何を語っているのか分からなくても、「音楽は素晴らしかった」という感想も事実なのです。

音楽は、聴いた途端に、それが何を語っているのか考える前に、直接、私たちの感性を刺激して、綺麗とか汚いとか、心地いいとか不愉快とか、判断させる芸術です。ですから、バッハの音楽が、それが語っていることとは全く無関係に、広く日本人に愛好されていても不思議ではありません。その最たる例は、テレビの CM やドラマの BGM で、勿論、全く断片的に、バッハの音楽がしばしば聞こえることです。確かに、他のクラシック音楽もこのような使い方がされていますが、バッハとなると、少々知っているせいか、え、こんなところで？とそのミスマッチに独り苦笑しています。しかしこの現象は、バッハの音楽が作曲家の意図から離れて、一人歩きできる力を持っていることを示しているのです。

\* \* \*

それにもかかわらず、バッハの音楽に、作曲者の意図から離れて一人歩き出来る力がある原因は、逆説的に聞こえるかもしれませんが、本来、彼が常に言葉を忠実に音楽化しようとしたからだ、私は考えます。ただ感性に訴える音楽とは違って、深い内容を持つ言葉に裏打ちされた音楽には、永続的感動をさそう力があるのではないかと考えるからです。私たちが、モテット「イエスよ、私の喜びよ」から受ける感動は、バッハが歌詞の難しさをそのまま音楽化した難しさに由来するのです。ですから、何を語っているのか分からなくても受けた感動が、意味内容が分かれば分かるほど深くなる音楽なのです。

バッハの森で私たちは、バッハの音楽の響きに感動し、その響きで彼が何を語ろうとしたかを探し求め、最後にそれを演奏する喜びを楽しんでいます。皆様もご一緒にバッハの音楽を楽しみませんか。ご参加をお待ちしております。(石田友雄)

# 復活した命と生きる

J. S. バッハ：モテット

「イエスよ、私の喜びよ」

Motette“Jesu, meine Freude” (BWV 227)

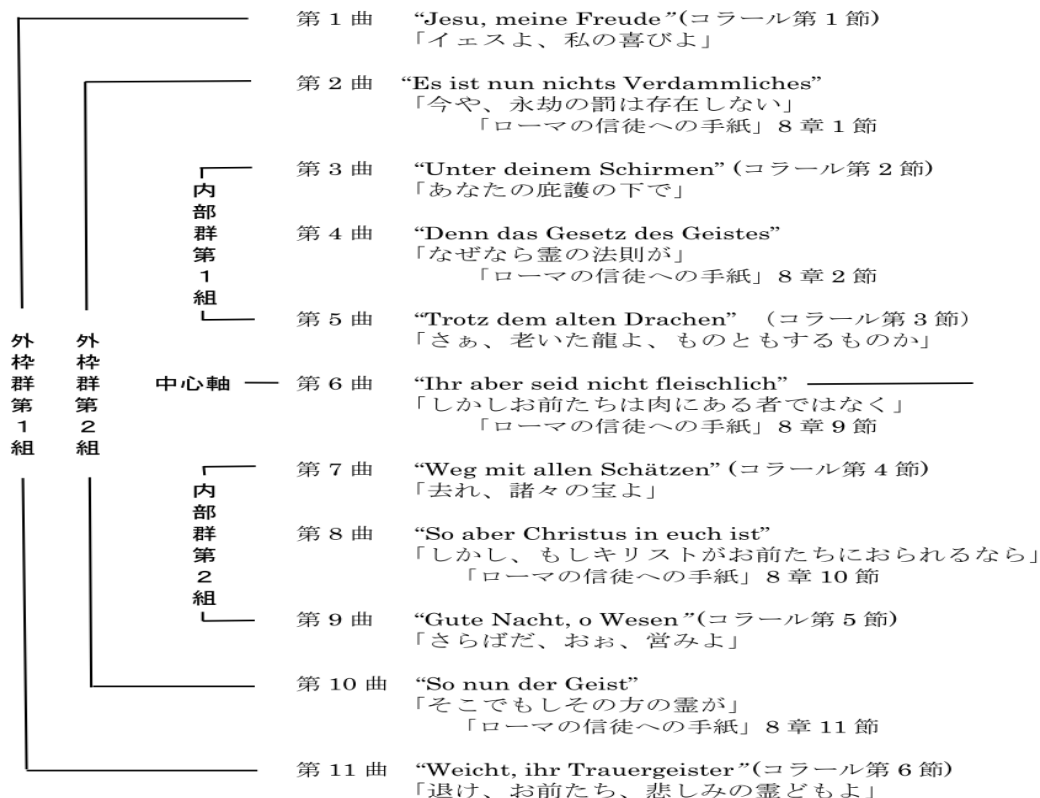
\* 2017年6月25日にバッハの森レクチャーコンサートで朗読したレクチャーです。

## 対称形（シンメトリー）の構成

モテット「イエスよ、私の喜びよ」“Jesu, meine Freude” (BWV 227) は、葬儀のためにバッハが作曲したと考えられています。しかし誰の葬儀であったか分かっていません。作曲年代は1723年から35年の間、彼の40代の作曲と推定されます。

このモテットは、バッハの時代より約100年前にヨーハン・フランクが作詞、ヨーハン・クリューガーが作曲した全6節のコラール「イエスよ、私の喜びよ」各節の間に、新約聖書から「ローマの信徒への手紙」8章1, 2節、9～11節の5句を挿入した全11曲の合唱曲です。その結果、奇数番号の6曲（第1, 3, 5, 7, 9, 11曲）はコラール、偶数番号の5曲（第2, 4, 6, 8, 10曲）は挿入聖句になっています。

## モテット「イエスよ、私の喜びよ」の構成



このように、韻文の有節詩であるコラールと散文の解説的文章である聖句が、交互に配列された特殊な歌詞です。信徒である「私」が、個人的な思いをイエスに熱く告白するコラールに対して、パウロがローマの信徒に宛てた手紙から抜粋された挿入聖句は、死から復活したイエス・キリストのように、彼を信じる信徒も死から復活する、と解説します。

音楽として、コラールの6曲は、その旋律を真っ直ぐ歌う曲だけではなく、コラール旋律をパラフレーズしたドラマティックな幻想曲にもなっています。他方、挿入聖句は本来解説ですが、バッハはこれを自由曲として、その内容を豊かに表現しますので、カンタータのレチタティーヴォのような朗唱ではありません。それにもかかわらず、基本的に聖句はコラールの解説の役割を果たしています。

ここで、モテットの構成図をご覧ください。このモテットは、コラール本来の対称的構成を基にして、第6曲：「しかしお前たちは肉にある者ではなく」を中心軸とする対称形（シンメトリー）になっています。まず二組の外枠群があります。その第1組は、第1曲と第11曲、すなわち、コラールの第1節と第6節から構成され、第2組は、第2曲と第10曲の自由曲で、挿入聖句による第1組の解説です。なお二組の内部群については後で説明します。

## イエスは私の喜び

外枠群第1組・第1曲（コラール第1節）  
第1曲 コラール第1節 4声（ソプラノ I+II, アル  
ト, テノール, バス）ホ短調 4/4

イエスよ、私の喜びよ、  
私の心の牧場よ、  
イエスよ、私の飾りよ、  
ああ、どれほど久しく、ああ、久しい間、  
心騒がせ、  
あなたを慕い求めてきたことでしょうか。  
神の小羊、私の花婿よ、  
あなたの他に、地上で私には  
何ものも他により深く愛すものになりません。

このコラールは、各節が3行 x 3行 x 3行からなる詩文です。先ず「イエスよ」と呼びかけた「私」が、イエスは「私の喜び」と述べ、その「喜び」を「牧場」、「飾り」などに譬え、次の3行で、はるか以前からドキドキしながら貴方をお慕い申し上げてきました、と告白します。最後の3行は、先ず「神の小羊、私の花婿」と、イエスが何者であるか伝えますが、その意味は外枠群第2組で説明します。そして、地上に貴方より愛す者は今後も現れません、と愛を告白して終わります。

外枠群第1組・第2曲＝第11曲（コラール第6節）  
第11曲 コラール第6節 4声（ソプラノ I+II, アル  
ト, テノール, バス）ホ短調 4/4

退け、お前たち、悲しみの霊どもよ、  
なぜなら、私の喜びの君、  
イエスが入って来られるのだから。  
神を愛す人々には  
その嘆きもまた  
ただ甘いものなのです。  
たとえここで私が嘲りと辱めに耐えていても、  
なおあなたも苦しみの中に  
留まっていてくださいます、  
イエスよ、私の喜びよ。

「喜び」の敵、「悲しみの霊ども」に、イエスが「入る」場所を空ける、と命じて第11曲は始まります。「悲しみの霊ども」が何かは徐々に分かります。空いた場所にイエスを迎え入れ、神、すなわち、イエスを愛す者には嘆き悲しみも「甘いもの」になる。苦しいときに、あなたが一緒にいてくださるから、と語り、「イエスよ、私の喜びよ」と第1曲の最初の呼びかけと同じ言葉で終わります。ただし、第1曲と第11曲の間には明らかに展開があります。

第1曲で「私」は、「あちら」にいるイエスに向かって、貴方の他に愛す者は現れないと「将来」の約

束をしますが、第11曲では「あちら」ではなく「ここ」で、「将来」ではなく「今」、貴方は「私」と一緒にいてくださる、と述べます。ですから、「イエスよ、私の喜びよ」という呼びかけの言葉には、最初「あなたは私の喜びになってください、あなたを私の喜びにします」という願いと決意が籠められていますが、最後にこの同じ呼びかけは、「今や、あなたは私の喜びになりました」という告白になります。

このように、第1曲の願いと決意が第11曲で実現しています。しかし、結局、この2曲、すなわち、モテット外枠群第1組のテーマは、「イエスは私の喜び」という同一の思いです。そこでバッハは、この2曲を全く同じ単純4声体コラールにすることによって、テーマの同一性を表しました。

## イエスを信じ聖霊を宿す者に死はない

外枠群第2組・第1曲＝第2曲（挿入聖句）  
第2曲 ローマの信徒への手紙8章1節 5声（ソ  
プラノ I, II, アルト, テノール, バス）ホ短  
調 3/2

今や、永劫の罰は存在しない、  
キリスト・イエスにある者たちに。  
彼らは肉に従って歩まず、  
霊に従って歩む者たちである。

外枠群第1組のコラールの歌詞には、イエスに向かう「私」の個人的な熱い思いが溢れていますが、パウロの手紙の引用である外枠群第2組は、全く違う性質の文章です。パウロは、キリスト教の最初の解説者でした。ここでもイエス・キリストと信徒の関係を客観的に説明します。

先ず「存在しない」と断言する「永劫の罰」とは何でしょうか。マタイによる福音書（25章31節以下）が伝える民話的な物語によると、陰府に降って最後の審判を待っていた死人たちは、再臨したイエス・キリストの前で、生前、困窮している兄弟に親切にしたかどうかに応じて審判を受け、祝福された者たちは天の王国に入り、呪われた者たちには「永劫の罰」、すなわち、「永遠の死」が宣告されます。この永遠の死が「イエス・キリストにある者たち」にはなくなったと言うのです。なぜでしょうか。

ここでモテット第1曲で、イエスが「神の小羊」と呼ばれたことを思い出してください。初代キリスト教徒は、イエス・キリストが十字架の上で流した血は、「過越の小羊」の血のように、人間を死から救い出したと解釈しました。旧約聖書の伝承によると、エジプトで奴隷にされていたイスラエル人の先祖が、モーセに率いられてエジプトを脱出したとき、神のお告げを受け、家の入り口の柱と鴨居に小羊の血を塗りました。その夜、死神が現れてエジプト中

の子どもを殺しましたが、入り口に小羊の血が塗ってある家は「過ぎ越し」しました(出エジプト記 12 章)。  
この「過越の小羊」のように、イエスは自分の血によって死神の侵入を防いだ、と信じた初代キリスト教徒は、彼を「神の小羊」と呼ぶようになります。ですから、死を防ぐ力を持つ「神の小羊」、イエスを信じる者たちには、最早、最後の審判で宣告される「永遠の死」は存在しないと言うのです。

外枠群第 2 組・第 2 曲＝第 10 曲 (挿入聖句)  
第 10 曲 ローマの信徒への手紙 8 章 11 節 5 声(ソプラノ I, II, アルト, テノール, バス) ホ短調 3/2

そこでもし  
イエスを死人たちより甦らせたその方の霊が  
お前たちに宿っておられるなら、  
その同じ方は、またキリストを  
死人たちより甦らせたその方は、  
お前たちの死すべき体を生かしてくださるだろう、  
彼の霊がお前たちに宿っておられる、  
そのことのゆえに。

いささか難解な文章ですが、整理すると、イエス・キリストを陰府(冥)から復活させた方、すなわち、父なる神の霊が宿っている者は、その同じ方、すなわち、父なる神によってイエス・キリストと同じように復活させられる、と言うのです。  
外枠群第 2 組は両曲とも 5 声の自由曲ですが、バッハはここで美事な解釈を示します。モテット第 2 曲と第 10 曲にほぼ同じ音楽をつけるのです。それによって、第 2 曲が語る、信徒が「イエス・キリストにある」ことも、「肉に従って歩まず、霊に従って歩む」ことも、それは、第 10 曲が語る、父なる神の霊が信徒に「宿っていること」であり、同時に、信徒がイエス・キリストと同様に、復活して永遠の命を生きることを意味している、という説明を同じ音楽によって示したのです。  
以上、外枠群の第 1 組と第 2 組は、同じ音楽によって完全なシンメトリーになっています。

### 「神の小羊」の庇護の下の自由

二組の内部群は、それぞれコラール+聖句+コラールの 3 曲で成立しています。

内部群第 1 組・第 3 曲 (コラール第 2 節)  
第 5 曲 (コラール第 3 節)  
第 4 曲 (挿入聖句)  
第 3 曲 コラール第 2 節 5 声 (ソプラノ I, II, アルト, テノール, バス) ホ短調 4/4

あなたの庇護の下で  
私はすべての敵の嵐に  
対して自由です。

サタンよ、雷を落とせ。  
敵よ、猛り立て。  
私の側(カテラ)にはイエスが立っておられる。  
たとえ、今、雷鳴が轟き稲妻が走っても、  
たとえ罪と陰府(冥)が脅しても、  
イエスは私を庇(か)ってくださる。

第 5 曲 コラール第 3 節 5 声(ソプラノ I, II, アルト, テノール, バス) ホ短調 3/4

さあ、老いた龍よ、ものともするものか。  
さあ、死の大きく開いた口よ、ものとも  
するものか。  
それに加えて恐怖よ、ものともするものか。  
世よ、怒り狂って砕け散れ。  
私はここに立って歌う、  
全く確かな平安のうちに。  
神の力が私を顧みていてくださる。  
地と深淵は沈黙せざるをえない、  
たとえなお激しくうなづいていても。

モテット第 3 曲、すなわち、コラール第 2 節は、「あなたの庇護の下で・・・私は自由です」と歌い始めます。ここで再び、第 1 曲で、イエスが「神の小羊」と呼ばれることを思い出してください。自分の血によって死神の侵入を防いだ「過越の小羊」のように、イエス・キリストは私を護ってくださる。だから、私はすべての敵の襲撃の前で「自由」でいられる、と言うのです。後は、「すべての敵」の名を、サタン、雷、稲妻、罪、陰府などと列挙して、これらの敵に対して、「イエスは私の側(カテラ)に立っておられる」、「イエスは私を庇(か)ってくださる」とイエスの庇護を語ります。

モテット第 5 曲のテーマは第 3 曲と同じですが、ここでは、敵が神話的なモンスターとして登場します。「老いた龍」とは、全人類を惑わす悪魔としてヨハネの黙示録(12 章 7~9 節)が描く墮落天使です。この怪物は、そもそもエデンの園で女をだまして神の命令に背かせ、人間を死すべき存在にした蛇です。だから、「死の大きく開いた口」であり、「恐怖」でもあります。黙示録によれば、老いた龍とその一味は天を乗っ取ろうとしましたが、天使ミカエルに率いられた天使の群れと戦って破れ、天から投げ落とされました。しかもこの戦いは、小羊の血の救い、すなわち、キリストの救いを命がけで証言し続けた信徒たちの勝利でもあった、と説明されます。

コラールの詩人は、この恐ろしいモンスターに対して、“Trotz”「ものともしないぞ」と挑戦的な姿勢をとり、たとえ彼らが怒り狂っても、私はここで心安らかに歌を歌うと語ります。それは、「神の力が顧みていてくださる」からです。最後に出てくる「地と深淵」は、神が天地を創造したときに退治した敵対勢力を指し、「すべての敵」の残党がまだいるが、最早その力は無力化されたと言うのです。コラール第 3 節を歌詞とするこの曲は、全体にわたってコラール旋律が重要な音楽的動機になっています

が、大胆にパラフレーズされ、ドラマティックなコーラル・ファンタジーになっています。

このように第3曲と第5曲が、敵、すなわち、「死神」に攻められても、自分の血を流して「死神」から護ってくださった「小羊」、すなわち、イエス・キリストの庇護の下で「私」は安全だと歌ったことを、第4曲は散文的に解説します。

内部群第1組・第4曲(挿入聖句)

第4曲 ローマの信徒への手紙8章2節 3声(ソプラノ I, II, アルト) ホ短調 3/4

なぜなら、霊の法則、すなわち、  
キリスト・イエスにあって生かす(霊の法則)が  
私を自由にしたからだ、  
罪と死の法則から。

コーラルが「敵」の姿を「陰府(ヨミ)」、「老いた龍」などと幻想的な言葉で表現したことを、挿入聖句は「罪と死の法則」と解説し、「神の小羊」として「死神」から人々を護ったイエスの救いの行為を「霊の法則」と呼びます。そして、それは「キリスト・イエスにあって生かす」法則であり、それが「私を自由(frei)にした」と言います。実際、第3曲は、イエスの庇護の下で「私はすべての敵の嵐に対して自由(frei)です」と、同じ「自由」を用います。また「キリスト・イエスにあって生かす」という説明は、第2曲の「キリスト・イエスにある者たちに、永劫の罰は存在しない」と同じことを語っています。

## イエスの「花嫁」に相応しい生き方

内部群第2組・第7曲(コーラル第4節)

第9曲(コーラル第5節)

第8曲(挿入聖句)

第7曲 コーラル第4節 4声(ソプラノ I+II, アルト, テノール, バス) ホ短調 4/4

去れ、諸々の宝よ。  
あなたが私の楽しみです、  
イエスよ、私の喜悅(ヨコビ)よ。  
去れ、お前たち、空しい誉れよ、  
私はお前たちに聞き従わない。  
私に知られず留まっておれ。  
悲惨、困窮、十字架、恥と死は、  
たとえ私が大いに苦しまなければならなくとも、  
私をイエスから引き離すことはない。

第9曲 コーラル第5節 4声(ソプラノ I, II, アルト, テノール) イ短調 2/4

さらばだ、おお、営みよ、  
世が選ぶ営みよ。  
私はお前が気にいらぬ。  
さらばだ、お前たち、罪よ、

はるか後ろに留まっておれ。  
もう光りのうちに現れるな。  
さらばだ、高慢と虚飾よ。  
お前、悪徳の生活よ、お前には完全に  
さらばだ。

第7曲は“Weg!”「去れ」、第9曲は“Gute Nacht!”「さらばだ」をキーワードとして繰り返します。

“Weg!”は、「どけ!」、「うせろ!」などとも訳せる強い感情的表現です。“Gute Nacht”は、一般的には「お休みなさい」という夜の別れの挨拶ですが、ここでは「二度と会わない」という決別の意味で用いられています。ですから、「諸々の宝」、「空しい誉れ」、「高慢と虚飾」、「悪徳の生活」などに向かって、「去れ」、或いは「さらばだ」と告げるコーラルの詩人は、世の中で尊重されるものや、世にはびこる生き方を決然と排除しているのです。その結果、「悲惨、困窮・・・」などに見舞われても構わない、自分の“Lust”はイエスなのだから、と歌います。

“Lust”は“Freude”の同義語で、どちらも「喜び」ですが、“Freude”は「嬉しい、満足した気分」であるのに対して、“Lust”は「楽しんで得た歓喜」を表します。そこで、「諸々の宝」、「空しい誉れ」と対比して、イエスが私の“Lust”だ、と言うとき、コーラルの始めと終わりで告白する「イエスよ、私の喜び(Freude)よ」とは違う、イエスを知り、イエスに相応しく生きる喜びが表現されています。

“Jesu, meine Lust!”「イエスよ、私の喜悅(ヨコビ)よ」という告白を含む、第7曲と第9曲の「この世」に対する決別の姿勢は、「神の小羊」イエスを「私の花婿」と呼ぶ第1曲に由来します。イエスを「花婿」にしたときに、イエスは「私」の「喜悅(ヨコビ)」になり、「私」は彼に相応しい者にならなければならないのです。この世の権力によって十字架で処刑された「神の小羊」を「花婿」にする「花嫁」が「世が選ぶ営み」を拒否するのは当然です。

このように、第7曲と第9曲が語る生き方を、第8曲は「霊と肉」という述語を用いて説明します。この述語が第2曲で、「キリスト・イエスにある者たち」とは、「肉に従って歩まず、霊に従って歩む者たちである」と定義していることと、第10曲で、それはキリストの霊が信徒に宿っていることだ、とバッハが解釈したことについてはすでに述べました。

内部群第2組・第8曲(挿入聖句)

第8曲 ローマの信徒への手紙8章10節 3声(アルト, テノール, バス) ハ長調 12/8

しかし、もしキリストがお前たちにおられるなら、  
実際、体は罪のゆえに死んでいても、  
霊は命である(=生きている)、  
義(=神の救い)のゆえに。

この短い説明の中には、肉に従う生き方、すなわち、世が選ぶ営みは死に向かっていくが、霊に従う生き方、すなわち、イエスの霊を自分の中に住まわ

せ、イエスを「喜悅(ἡγορία)」とする者たちは、神がイエスを通して与える救いのゆえに命に向かって生きている、という意味が籠められています。

## キリストの霊を宿して生きる

対称形（シンメトリー）の中心軸・第6曲

第6曲 ローマの信徒への手紙8章9節 5声（ソプラノ I, II, アルト, テノール, バス）ホ短調 4/4

しかしお前たちは肉にある者ではなく、  
霊にある者だ、  
もし神の霊がお前たちに宿っておられるなら。  
しかしキリストの霊を持たない者、  
彼はキリストのものではない。

バッハはこの曲を二つの主題を持つ5声の二重フーガとして作曲しました。「しかしお前たちは肉にある者ではなく、霊にある者だ」が第1主題、「もし神の霊がお前たちに宿っておられるなら」が第2主題になります。第1主題のフーガが16小節にわたって展開した後、第2主題のフーガが7小節のストレットの形で歌われ、最後に両主題が同時に歌われて盛り上がります。このような二重フーガは、一つのことを二つの側面から語っていることを示しています。お前たちが“geistlich”「霊にある」とは、神の霊がお前たちに“wohnet”「宿っている」ことだ、と言っているのです。なおこの2語にはダイナミックな霊の働きを表す長いメリスマがついています。

モテット第6曲は、二重フーガに続いて、「しかしキリストの霊を持たない者、彼はキリストのものではない」と全5声がホモフォニクのアダジオで歌って終わります。信徒に宿る霊が、間違いなく「キリストの霊だ」ということの強調です。このように、モテット第6曲は、全曲の中心軸として、死すべき存在である人間が、キリストの霊を宿し、肉を捨てて霊に生きることにより、復活して新しい命を得る、と語っているのです。

## この世で生きる復活した命

最後に、このモテットが、葬儀のために作曲された音楽であることを思い出してください。言うまでもなく、葬儀は死者を弔う、死者のための儀式です。ですから、葬儀のミサ「レクイエム」は「永遠の安息を彼らに与えてください、主よ」と、死者たちの安息を祈る入祭唱で始まります。ところが、「最後の審判」をテーマとする続唱「怒りの日、その日」になると、その日、墓から呼び出されて審判を受ける死者たちとともに、もつばら、裁きを受ける自分自身の許しを願い、最後に死者のための祈りを一言

だけ付け加えて終わります。この続唱から、葬儀は死者のための儀式には違いありませんが、生きている自分のための儀式でもあることが見えてきます。当然です。死者のために「レクイエム」を唱えるのは生きている者なのです。

他方、愛す者を失ったとき、死者が死後どうなったのか、今、どうしているか、と思いつくのは自然な人情です。こうして描かれる死後の世界は、それぞれの伝統と文化に従い、世界各地でいろいろな言い伝えになってきました。ですから、「レクイエム」の続唱が伝える最後の審判は、中世のキリスト教徒の言葉で語られていますが、そこに、旧・新約聖書にまとめられた古代イスラエル・ユダヤの宗教文化、ヘブライズムの伝統に従って描かれた死後の世界があることは間違いありません。その特徴は、レクイエムを唱えている自分も、死者たちと一緒に最後の審判に呼び出されていることです。まだ生きている人間が、なぜ死者と一緒に裁かれるのでしょうか。

ここで、死に瀕した重病の床から神に癒やしを願ったヘブライの詩人の言葉を紹介しましょう。「陰府(ᾗ)はあなたに感謝しません。／死はあなたを讃美しません。／ただ生きている者、生きている者だけがあなたに感謝を捧げるのです」。だから私を陰府に送らないでください、と彼は祈ります（イザヤ書38章18, 19節）。ヘブライズムにおいては、死後の世界を描く際にも、今、この世で生きている人間が中心のテーマなのです。

それにしても、愛す者を失ったときの喪失感は、本当に深刻な痛みです。その癒やしを求めて、死者がまだ何らかの形で今なお自分と繋がっていると考え、それがより複雑な死後の世界を描きだしてきました。当然、この喪失感の癒やし方も、文化的伝統によって違ってきます。

私たちは、愛す者の死を経験して深い喪失感を味わった時に、初めて自分が生きていることに気付きます。初代キリスト教は、愛す者を失った深い喪失感に打ちのめされていた人々が、彼の死の意味を考えだしたときに発見した「自分の命」から始まりました。ヘブライズムの伝統を背負っていたナザレのイエスの弟子たちは、彼の死と自分たちの命の意味を悟ったときに、その経験を、生きている者だけが神を讃美し、神に感謝できるという、彼らの文化の言葉で説明しました。こうして、彼らは「死から復活したイエスと出会った」と言いだしたのです。他方、生前のイエスと会ったことがなかったパウロは、命である霊が肉である死に勝利したと解説しました。

モテット「イエスよ、私の喜びよ」“Jesu, meine Freude”は、愛す者の葬儀に際して、復活したイエスと出会った喜びを歌うコラールに、パウロの解説をつけて、永遠の命に生まれかわった命が、「この世」でイエスと共に生きていく喜びを歌う歌なのです。

(石田友雄)

## 友だちも、兄弟姉妹も、親子も 一緒に楽しむハンドベル

### 優れた楽しい午前のクラス

今年4月から、「はじめてみよう！ハンドベル」というクラスが、小学生を対象に始まりました。春のコースは、毎月1回、第3日曜日に4回練習して8月20日の「夏休みの音楽会」で成果を発表することになっています。別所香苗さんと私（岩渕倫子）が講師を務め、當眞容子さんがオルガン伴奏に事務、それにアシスタントと色々助けてくださることになりました。最初は午前中だけの1クラスを開講する予定でしたが、予想をはるかに超える応募があり、急遽、午後のクラスも開くことにしました。今回、午後のクラスについては別所さんが報告してくださるので、私は午前のクラスの様子をご紹介します。

午前のクラスの受講生は、幼稚園の年長から小学4年生までの女の子9名と、そのお母さん方6名の計15名で構成されています。今回、このクラスは、ルネサンス時代の有名な作曲家、H. イザークの「インスブルックよ、私はお前を去らなければならない」につけた日本語の歌詞「わが故郷よ」を課題曲にしました。1時間半の練習では、まずオルガン伴奏で斉唱をして旋律に親しんでから、ハンドベルによりこの歌の編曲を合奏します。午前のクラスの受講生はほとんど皆ピアノを習っているので、楽譜を読むことに慣れており、初回からすぐ旋律を覚えてスムーズにベルを振る練習に移ることができました。

この子たちは音色にも敏感で、良い音を出すための振り方を指示するとすぐ実践したり、自分の音を確かめたりする姿が見られました。特に初歩者には、ベルを鳴らした後で音を止める「音の終わりの処理」が難しいのですが、最初に説明した後は、何も言わなくても自然にそれが出来ているので感心しました。このような受講生一人一人の力もさることながら、別所さんが楽譜や資料を細やかに準備してくださったことと、保育園で保育士さんをなさっている當眞さんが、子どもたち一人一人の様子をしっかり見てくださるだけでなく、ハンドベルの演奏についても子どもたちを手厚くサポートしてくださったため、音楽的にも優れた楽しいクラスになりました。

このクラスのもう一つの特徴は、親子で受講して

いる方が大勢いらっしゃることで、そこ、始めにお母さんたちだけで2声の編曲を練習し、その後子どもたちをいれた全員でベルを振る4声の編曲に続きます。大人の方々が、子どもたち以上に真剣に練習に臨み、演奏を通して交流を図っていらっしゃる姿を見ていると、音楽の持つ力の新しい側面を発見した思いで胸に迫るものがありました。ハンドベルは一人では演奏できません。ですから、親子や友人とともにハンドベルを演奏することにより、お互いの存在の大切さを再認識し、一緒に音楽する楽しさを味わっている皆さんの姿を見ていると、これまで教育と音楽に携わってきた私が目指している理想がここに具現化していると感じるのです。

9月から、バッハの森の学習コースとして、「バッハの森ハンドベル・リンガーズ」を組織することになりました。午前のクラスの皆さんと午後のクラスの皆さんが一緒になって、ハンドベルの新しいコースで演奏技術を高め、楽しく合奏できることがとても嬉しく、やりがいを感じています。同時に、ハンドベルの手ほどきを受けた皆さんが、これからバッハの森で出会う多様な音楽や文化に興味を広げていくことを願っています。（岩渕倫子）

\* \* \*

### 陽気で元気な午後のクラス

「はじめてみよう！ハンドベル」午後のクラスは下は年中さんの坊やから、上は小学6年生の頼れるお姉さんまで、総勢11名です。このうち兄弟姉妹で参加している子どもたちは4組もいます。女の子ばかりの午前のクラスとは対照的に、男の子が三分の二を占める陽気で元気なクラスです。

演奏する曲は19世紀のアイルランド民謡「ユビラテ・ランランラン」。遠くから鐘の音と喜びの歌が水辺を越えて聞こえてくるという、夏の宵の爽やかで楽しい情景が歌われています。シンプルなリズムと覚えやすいメロディーですが、クライマックスにはテーブルダンピングという特殊な演奏法が登場し、最後は6つからなる和音で高らかに歌い上げる素敵な曲です。

さあ、練習の始まりです。まずは歌の意味を確認した後で、當眞さんのオルガン伴奏に合わせて一緒に歌います。年上の2人は2個のベル、その他の子は1個のベルをそれぞれ握ってステージへ。初めて

ハンドベルに触れたという子がほとんどでしたが、練習を2回、3回と重ねるうちに鳴らすコツをつかみ、芯のあるしっかりした音が出るようになってきました。楽譜を見る子、歌詞に丸をつける子、そばでサポートする私たちの合図に合わせる子、みんなそれぞれの方法で自分の担当するベルを鳴らすタイミングをつかむようになります。それでもうっかりタイミングを逃がして振り損ねることもしばしば起こりますが、ゆっくりゆっくり自分の音がどこに出ているか確認しながら進みます。目標は、タイトル「ユピラテ」（ラテン語で「喜べ」の意）にふさわしく喜びの気持ちを生き生きと表現することで、練習に熱が入ります。子どもたちも、指導する私たちも真剣です。

練習開始から40分が過ぎる頃になると、子どもたちの体がぐねぐねと折り曲がってきます。ここで休憩にします。すると、それまで時に心配そうに、時に楽しげにわが子の頑張る姿を見守っていたお父さん、お母さんのもとにとんで行くのは東の間、ポジティブ・オルガンの周りに集まって、ストップを変えると変わる音色に興味しんしんの子たちもいれば、ハンドベルを並べた机の下に潜り込んで、もぐらたたきよろしくピョコピョコ顔を出してかくれんぼする子たちもいて、「はい、休憩おわり」と叫ぶ私の声がかき消されるほどです。声が枯れた私に代わって頼もしい岩渕さんにバトンタッチして練習を再開します。

最近、子どもたちがひたむきに取り組む様子の中に、ハンドベルが好き、という思いが芽生えてきたことを感じるようになってきました。天井の高い木造の美しい奏楽堂に響く、ハンドベルの澄んだ音色に驚きと感動を覚えた18年前を思い出します。きっとこの子たちも、きれいな音に純粹に心を動かされ、みんなで息を合わせて音楽を作り上げる楽しさを感じているのではないのでしょうか。この恵まれた素晴らしい空間で、一子先生から教えていただいたハンドベルの魅力を、子どもたちにいかに伝えられるかが私の課題です。「ほら、こんなにいい音がするでしょう」と、子どものように響きを楽しんでおられた先生のお姿から、「きれいな音を聴く耳」がどんなに大切なことを教えていただきました。このような思いを胸に、これからも学んでいこうと思っています。この子たちが家に帰ってから、バッハの森でお兄ちゃんやお姉ちゃんが活躍したこと、弟や妹が頑張ったことなどが話題になって、食卓で花咲いていることを願いつつ。

そうそう、8月20日の「夏休みの音楽会」でこの子たちのハンドベルの発表が行われます。皆様、子どもたちの練習の成果をぜひ聴きにきてくださいね。  
(別所香苗)



## アーレント・オルガンの修復

2011年9月、2014年3月、今年4月と3回、7年間におよんだ、テイラー&ブーディー・オルガン工場の技師、ロビー・ローソン氏とクリス・ボノ氏によるアーレント・オルガンの修復と耐震工事が終了しました。このための総費用は、606万2000円かかりました。それに対して587万3000円の募金があり、差額18万9000円は一般会計から補填しました。なお募金の中には、100万円と50万円の大口寄付が1口づつ含まれています。感謝とともにご報告いたします。なお、3年から5年のうちに調整、調律が必要になり、そのために50万円から100万円の費用がかかる見込みです。(石田友雄)



2016年度・統計

会員数 (2017. 3. 31) 入退会者数					
維持会員	86人	入会	退会	増減	
賛助会員	36人	維持会員	8	12	-4
計	122人	賛助会員	1	2	-1
		計	9	14	-5

集会回数

参加者延べ人数 (2016. 4. 1~2017. 3. 31)

学習コース	回数	延べ人数
クワイア (混声合唱)	33	561
器楽アンサンブル	11	44
声楽アンサンブル	10	56
ハンドベル・クワイア	15	61
オルガン音楽研究会	15	113
コーラル研究会	15	94
クラヴィコード・オルガン教室	11	29
チェンバロ教室	2	10
オルガン教室	1	2
オルガン・クラブ	12	37
読書会 聖書	28	209
オルガン・クラヴィコード・		
チェンバロ練習	201	337
クリスマス祝会	1	27
小計	355	1,580

公開プログラム

コーラルとカンタータ	29	358
コンサート	4	175
音楽会	2	90
教会音楽ワークショップ	2 (4日)	197
ワークショップ (+音楽会)	2	30
特別練習	3	29
小計	42	879

運営活動

運営委員会	42	168
理事会	1	5
評議員会	1	7
有志懇談会	1	17
クリスマス飾り付け	1	5
クリスマス片付け、大掃除	2	15
オルガン修復作業	1	3
打ち合わせ	2	17
小計	51	237

その他

ヴァイオリン・リサイタル(杉田せつ子)	1	80
イタリアオルガン・コンサート (宮本とも子)	1	40
ハンドベル・デモンストラーション	1	2
録音	1	3
来訪	2	2
小計	6	127

総計

454回 2,823人

会計報告 (2016.4.1~2017.3.31)

経常収支

単位：千円

収入の部

基本財産受取利息	1
特定財産受取利息	0
年会費 (維持・賛助会費)	771
事業収益	
1) 研究会 (学習コース)	1,715
2) 公開講座	127
3) コンサート	281
4) ワークショップ	332
5) 音楽教室	115
6) 楽器使用料	191
7) 賃料収益 (家賃収入)	1,285
一般寄付金	477
雑収益 (管理棟家賃、コピー代ほか)	782
計	6,077

支出の部

給与手当	913
支払報酬 (会計事務所)	165
旅費交通費	264
通信運搬費 (郵送料、電話、ネット関係)	188
什器備品費	0
消耗品費 (コピー用紙、文具他)	46
修繕費 (楽器メンテ、植栽)	739
印刷製本費 (パツハの森通信、封筒印刷)	59
光熱水料費	552
賃借費 (地代、機器リース料)	1,167
火災保険料	123
諸謝金	855
租税公課 (固定資産税、法人事業税)	372
負担金 (振込手数料)	3
雑費 (コピー使用料ほか)	85
特別会計補助 (建物維持)	570
計	6,101
当期経常増減額	-24

指定寄付収支

単位：千円

収入の部

土地地上権積立

前期繰越	983
寄付	4
利息	0
計	987

支出の部

建物維持・修理

前期繰越	235	建物修理	2,080
寄付	465	(奏楽堂、デッキ)	
借入金	1,000		
利息	0		
一般会計より	570	繰越	190
計	2,270		2,270

オルガン修復

前期繰越	817	オルガン修繕	
寄付	176	繰越	993
計	993		993

借入金 (2017.3.31 現在)

単位：千円

長期借入金	34,000
短期借入金 (建物維持)	3,540
短期借入金 (新法人移行他)	2,700
計	40,240

4. 6, 13, 20, 27 運営委員会 参加者 4, 4, 5, 4 名。  
 4. 7~8. 20 初夏のシーズン  
 4. 16 はじめてみよう! ハンドベル・春のコース  
 参加者 午前 26 名、午後 22 名。  
 4. 29, 30 教会音楽ワークショップ (モテット  
 「イエスよ、私の喜びよ」参加者: 合唱と  
 解説 (4 回) 60 名、解説 (1 回) 14 名、  
 オルガン (14 名)、合唱 (1 回) 16 名。  
 5. 10~27 外壁塗装 コミュニティーセンター  
 5. 11, 18, 25 運営委員会 参加者 4, 5, 4 名。  
 5. 15 エアコン設置 (奏楽堂)  
 5. 21 はじめてみよう! ハンドベル・春のコース  
 参加者 午前 21 名、午後 10 名。  
 6. 1, 8, 15, 22, 29 運営委員会 参加者 4, 4, 3, 4,  
 4 名。  
 6. 18 打ち合わせ 夏休みの音楽会 参加者 8 名。  
 はじめてみよう! ハンドベル・春のコース  
 参加者 午前 24 名、午後 21 名。  
 6. 24 有志懇談会 参加者 13 名。  
 一般財団法人バッハの森評議員会 参加者  
 6 名。  
 6. 25 オルガン調整。河内克彦氏、舜氏。  
 レクチャーコンサート「イエスよ、私の喜  
 びよ」参加者 54 名。

#### J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

- コラール・カンタータ研究  
 コラールとカンタータ (JSB)  
 4. 8 復活祭第 3 祝日のカンタータ「平安がお前と  
 ともにあるように」(BWV 158); コラール  
 「主は死の縄目に」。オルガン: J. S. バッハ  
 「ここに真の復活祭の小羊がいる」(BWV  
 158/4)、當眞容子。参加者 11 名。  
 4. 15 第 417 回、オルガン: H. シャイデマン「キ  
 リストは死の縄目につき」、當眞容子。参加者  
 10 名。  
 4. 22 ミゼリコルディアス・ドミニのカンタータ  
 「あなた、イスラエルの羊飼いや、聞いてくださ  
 い」(BWV 104); コラール「主はわが飼いや、  
 頼る牧人」。オルガン: J. S. バッハ「主は私の  
 誠実な羊飼いや」(BWV 104/6)、當眞容子。参  
 加者 9 名。  
 5. 6 第 418 回、オルガン: J. S. バッハ「いと高き  
 ところにいます御神にのみ栄光あれ」(BWV  
 717)、安西文子。参加者 13 名。  
 5. 13 ユピラーテのカンタータ「泣き、嘆き、憂い、  
 怯え」(BWV 12); コラール「御神の御業はこ  
 とごとく善し」。オルガン: J. S. バッハ「神が  
 なさること、それは善くしてくださること  
 です」(BWV 12/7)、笠間きよ子。参加者 9 名。  
 5. 20 第 419 回、オルガン: J. G. ヴァルター「御  
 神がなさること、それは善くしてくださること  
 です」、笠間きよ子。参加者 13 名。  
 5. 27 聖霊降臨祭第 2 祝日のカンタータ「思いを尽  
 くして私はいと高い方を愛します」(BWV 174);  
 コラール「心より愛す、主よ、願いまつる」。  
 オルガン: J. S. バッハ「心より私はあなたを愛

します、おお主よ」、(BWV 174/5)、安西文子。  
 参加者 8 名。

6. 3 第 420 回、オルガン: J. G. ヴァルター「心  
 より私はあなたを愛します、おお主よ」、安西文  
 子。参加者 10 名。  
 6. 10 三位一体後第 4 主日のカンタータ「永遠の愛  
 の憐れみの心よ」(BWV 185); コラール「われ  
 呼ぶ、主イエスよ」。オルガン: J. S. バッハ「私  
 はあなたを呼び求めます、主イエス・キリスト  
 よ」(BWV 185/6)、金谷尚美。参加者 13 名。  
 6. 17 第 421 回、オルガン: J. S. バッハ「私はあ  
 なたを呼び求めます、主イエス・キリストよ」  
 (BWV 639)、金谷尚美。参加者 12 名。

#### 学習コース

- バッハの森・クワイア (混声合唱) 4. 8/14 名、  
 4. 15/10 名、4. 22/13 名、5. 6/13 名、  
 5. 13/13 名、5. 20/16 名、5. 27/13 名、  
 6. 3/16 名、6. 10/17 名、6. 17/17 名、  
 6. 24 (ゲネプロ) /18 名。  
 バッハの森・ハンドベル・クワイア 5. 20/4 名、  
 6. 3/4 名、6. 17/4 名。  
 バッハの森・声楽アンサンブル 5. 6/5 名、  
 5. 13/5 名、6. 10/6 名。  
 バッハの森・器楽アンサンブル 6. 10/3 名、  
 6. 17/3 名。  
 オルガン音楽研究会 4. 21 /9 名、5. 12/8 名、  
 5. 26/10 名、6. 9/9 名、6. 23/10 名。  
 コラール研究会 4. 7/7 名、4. 21/8 名、  
 5. 12/4 名、5. 26/8 名、6. 9/7 名。  
 クラヴィコード・オルガン教室 4. 21/4 名、  
 5. 12/2 名、5. 26/3 名、6. 9/2 名、  
 6. 23/3 名。  
 オルガン・クラブ 4. 14/3 名、4. 28/3 名、  
 5. 19/3 名、6. 2/3 名。  
 読書会: 聖書 4. 8/5 名、4. 15/5 名、  
 4. 22/7 名、5. 6/6 名、5. 13/5 名、  
 5. 20/6 名、5. 27/5 名、6. 3/5 名、  
 6. 10/7 名、6. 17/7 名。  
 オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習  
 4. 4/2 名、4. 5/1 名、4. 7/4 名、4. 8/2 名、  
 4. 11/2 名、4. 12/1 名、4. 13/1 名、  
 4. 14/2 名、4. 15 /2 名、4. 18/2 名、  
 4. 19/2 名、4. 20/2 名、4. 21/1 名、  
 4. 22/2 名、4. 25/1 名、4. 27/1 名、  
 4. 28/2 名、5. 2/1 名、5. 6/2 名、  
 5. 9/1 名、5. 10/2 名、5. 11/ 2 名、  
 5. 12/2 名、5. 13/1 名、5. 16/2 名、  
 5. 17/2 名、5. 18/1 名、5. 19/2 名、  
 5. 23/2 名、5. 24/1 名、5. 25/2 名、  
 5. 27/2 名、5. 30/1 名、5. 31/1 名、  
 6. 1/3 名、6. 2/3 名、6. 3/1 名、6. 7/1 名、  
 6. 8/2 名、6. 9/1 名、6. 10/1 名、  
 6. 14/1 名、6. 15/1 名、6. 16/2 名、  
 6. 17/1 名、6. 20/2 名、6. 21/1 名、  
 6. 22/1 名、6. 23/1 名、6. 24/1 名、  
 6. 28/1 名、6. 29/1 名、6. 30/2 名。